

あなたがゴツホなら

作・広島友好

○登場人物

照林伴介（てるばやしべんすけ） 絵描き・七七歳

照林藍子（あいこ） 伴介の妻・七八歳

照林美里（みきと） 伴介・藍子の娘・四八歳

○時

現代

○所

伴介と藍子の住む家。その居間。

照林伴介と藍子の住む家。その居間。

居間から上手側に入った所に台所。そのとなりに風呂がある。逆に、下手側には玄関。また、居間の奥には、廊下を隔てて、伴介のアトリエ兼書斎がある。伴介は、夜、そこで寝ている。二階には藍子の寝室がある……という想定。

ある日の午後。今、居間には誰もいない……。

と、玄関の郵便ポストに手紙を取りに行つていた伴介が戻つてくる。手に数通の封筒や葉書。その中の一枚の葉書を目にして、ふと足が止まる。

伴介　（じつと葉書を見つめて）…………。

老犬のシェーンが吠える声がする。…………

玄関の戸を開ける音がする。

美里（声）　お父さん、おるの？

伴介　おおつ。

娘の美里が居間に入ってくる。

伴介　ああ。

美里　……何？　なんかあつた？

伴介　……喪中葉書。

美里　誰か……亡くなつたの？

伴介　高校んときの……友達……。

美里　前も、確か……？

伴介　あれは絵描きの仲間だよ。フ、次から次と……。

美里　……大丈夫？

伴介　もう慣れっこだよ。

間。

伴介 時間かかつたな。

美里 こんなもんよ。

伴介 ん……だな。

沈黙……

伴介 （恐れを抱きつつも聞かずにはおれずに）……それで？

美里 ショック受けないでね。

伴介 どうだつた……検査？

美里 言うことなんでも聞いてあげて。

間。

伴介 悪かったのか……？

美里 自分から言うつて。

伴介 母さんは？

美里 すぐ帰ると思う。買い物してる。気分転換。

伴介 ひとりで大丈夫なのか？

美里 わたし……仕事だから。もう行くね。

伴介 おおつい、もうちょっとといろよ……

美里 会議の準備があるから。忙しいの。

伴介 母さんが帰つて来るまで。

美里 わたしだつてッ。わたしだつてパニクつてんだからッ。

伴介 いいだろ、まだ。

美里 （居間を出ていきながら）お父さんのせいだかんねッ。

伴介 僕のせいって……！

美里（声） 苦労の蓄積ッ。ストレスがたまつてたんだよッお母さん。

美里、玄関を出していく。玄関の戸が乱暴に開け閉めされる音が響く。

伴介（唸つて）んく。

沈黙……伴介は思案気に居間の中を行きつ戻りつ歩く。

と、玄関の外でまた老犬のシェーンが親しげに吠える声がする。そして玄関の戸が開く

音がする。

藍子 (声は明るい) ただいま。

伴介 おうつ。

藍子 (居間に入ってきて) 美里、プリプリしてたけど?

伴介 いつものことだよ。なんかあると、俺に腹立て。

藍子 アハハ。

藍子は化粧氣のない顔に、こぎつぱりとした仕立てのいい服を着ている。ずいぶん着込  
んでいるが、清潔感があり、風合いがいい。

伴介 ……どうだつた?

藍子 (買ってきた物をエコバックから取り出して) 一度飲んでみたかったのよー、奮発しちやつ  
た。

伴介 何?

藍子 カヤマ珈琲で買っちゃつた。

伴介 高いんだろ、あの店?

藍子 （伴介にコーヒー豆の袋を見せて） コピ・ルアク。

伴介 聞いたことないな……。

藍子 教えない。またなんか腐すから。

伴介 なんも言わないよお俺、あなたの趣味に。

藍子 ホントにい?! ゲツとか言わない?

伴介 言わない。

藍子 このコーヒー豆……実は猫のウンチからできてる。

伴介 ゲツ?! 猫のウンチ?!

藍子 幻のコーヒーって言われてんの。飲んでみたかったの。

伴介 そんなの飲むから胃が痛くなる。

藍子 ガンとは関係ないから。かえつて予防になる、コーヒーは。

伴介 じゃ、なんでお腹が痛くなるのよ?

藍子 別の理由でしょ。ストレス。人間関係。金銭面の不安。家族のゴタゴタ。未来への不安。

伴介 フフ……。

間。

藍子 （ある決意を込めて）ねえ、お願ひ……！

伴介 飲めばいいよ、猫のウンチのコーヒー。心配してるだけ。

藍子 言われなくとも、飲む。じゃなくて。

伴介 何……？

間。

藍子 描いてほしいの……わたしの顔。

伴介 フ、今さら。

藍子 ヌードになつてあげてたでしょッ。

伴介 いつたいいつの話してるの……！ あのころは、モデルを雇うお金もなかつたから。

藍子 自分の顔ばつか描いて楽しい？

伴介 あのね……ゴッホを見習つてんの。試してんの、絵の可能性を。

藍子 個展に自分の顔をズラーッて並べるつもり？ ホラー絵画じゃないんだから。

伴介 自画像つてのは奥が深いんだよ。自分がことがいちばんわかんない。

藍子 妻のことはもつとわかつてない。

伴介 あんたはいつもミステリーウーマンです。

藍子 フフ。で、絵はそろった？ まじめな話。

伴介 前んときの絵じや……駄目か？

藍子 売れ残った絵じやどうしようもないでしょ。個展は新作で勝負しなきや。

伴介 んく。

藍子 たっかい会場費払つてんだから。

伴介 いつも銀座でやることないよ。どつか適當な所で……

藍子 照林伴介の価値を世に知らしめるためじやない。

伴介 にしても、二年に一回は多くないか？

藍子 ホントは毎年やりたいぐらい。

伴介 ……。

藍子 いい、個展は絶対やつてよ？ いい、約束よ？ わたしが……いなくなつても。

伴介 え……？

藍子 （微笑みを作つて）わたし……ステージ4だつた……！

伴介 （声にならない声を漏らす）……！

いつの間にか優しくあつたかい音楽が流れている。  
ふたりの顔に明かりを残しつつ……暗くなる。

タイトルが浮かび上がる。

『あなたがゴッホなら』

2

何日か後の夕方。美里が来ている。美里は、袋から買ってきた食料品や日用品をテーブルに出しながら。伴介は、美里が買ってきた物を手に取つて見たりしながら。

美里 少しは料理してるんだ、お父さん？

伴介 チャーハンなら得意だよ。ラーメン屋で二年バイトしてたから。

美里 塩つ気が多くんないよう気をつけてねえ。塩分取り過ぎると良くない。

伴介 今さら体の心配しても遅い……

美里 （怒氣を含んで）ええツ!!

伴介 て、母さんが言うんだ。うまいもん食べさせろって。

美里 からい物、好きだからなあ、キムチとか、担担麺とか。

伴介 胃に悪いって言ってんのに……。まあ、もう、好きな物食べさせるよ。

美里 薬ちゃんと飲ませてよ。

伴介 よく効くんだろうなあ。上でぐつたり寝てるよ。副作用かな、あれ。

美里 最近の抗ガン剤、いい薬が出てるみたい。結構副作用少ないらしいよ。

伴介 ちよつとは辛抱しなくちゃだな、入院したくないつつーんだから。

美里 言うだろうと思つた、入院嫌だつて。

伴介 治るんだつたらあれだけど……無理してでもあれさせること。

美里 なんでもつと早く気づかなかつたかなあ……。

伴介 もともと瘦せてるもん。お腹痛いってのもコーヒーとか、からいもんの食べ過ぎかと……。

黒藤先生も……今飲んでるリウマチの薬の副作用だろうつて言つてたし。（力なく自嘲して）  
ハハ、かかりつけの医者が見逃すんだから、わかんないよ俺だつて……。

美里 お父さん責めてるんじゃないよ。

伴介 ……ん。

美里 ……。

外で人懐っこいシェーンの吠える声がする。

美里 散歩に連れてけつて。

伴介 ん。

美里 シェーンも、いい年でしょ？

伴介 僕と同じぐらいかな、人間なら、周りは年寄りばつかだよ。やだやだ年寄りは。

美里 ハハハ。

伴介 ……ホントはな、猫がよかつたんだけど。

美里 え？ そんなの初耳。

伴介 母さんが、ほら、猫アレルギーだし。

美里 ああ。

伴介 犬がいいつて言い張るし、いつもの調子で。

美里 フフ。

伴介 んじや、ちょっと。

伴介はシェーンを散歩に連れていこうと、居間を出ていきかける。その伴介に……。

美里 （なるべくせうりと言おうとして）ここに……！

伴介 ん？

美里 ここに……戻つてきてもいいけど、わたし。

間。

伴介 ……や、無理せんでも。今の感じがいい距離だ。ちょくちょく来てくれてるし。

美里 ……。

伴介 ヤな上司が異動になつて、仕事がやりやすくなつたつて。

美里 それとこれとは……

伴介 生活のリズムもあるだろうし……ん。ありがと。ん。……じゃ。

伴介、居間を出していく。犬のシェーンのうれし気な吠える声が聞こえる。伴介（声）「（シェーンの首をなでている） よおし、よしよおし……」

散歩に出かけたようだ……

美里 （一つ大きく息をつく） ふうううう……。

二階の部屋から藍子が降りてくる。かなり体力が落ちて、足元が危うい。しかしまだ気力はあり、笑顔を見せて。着慣れているが、こぎこぎぱりとした部屋着姿。

美里 大丈夫う？

藍子 二階はもうきついかな……ハハ。

美里 奥の部屋使えばいいのに。

藍子 お義母さんの部屋だったから。荷物も整理できてないし。

美里 何年経つてんのよ、おばあちゃんが亡くなつて。

藍子 ん～、あの部屋にいると、いろいろ思い出しちやうのよお。

美里 仲良さそうに見えたけど。

藍子 神経戦よ。美里の前では優しいおばあちゃんと、いいお母さん。んでもって、お父さんは知らん顔、アハハ。

藍子は背もたれのある椅子に、笑みを浮かべながらも力を使い果たしたように腰かける。

藍子 どっこいしょ……フフ。

間。

美里 ……お父さんつてさ、わたしが絵をやめたの、まだゆるせないのかなあ。

藍子 美里は俺より才能があるってよく言ってた。

美里 絵じや食べてけないよお。親子二代で、お母さんに苦労かけたくない。

藍子 それは困る。ひとりで十分。せっせと稼いだ生涯賃金の半分は、お父さんにつぎ込んだ。地方の大学の職員なんて、大した給料もらえてなかつたしねえ。

美里 投資、大失敗じやない、ハハ。

藍子 今現在のところは……ね。あしたには、照林伴介の絵が世界で評価されてるかも、アハハ。

美里 わたし……自分を信じきれるほど馬鹿じやないから。馬鹿みたいに信じきれる才能がなかつた……お父さんみたいに。

藍子 違うのよ。途中でやめちや、割に合わなかつただけ。今、絵をやめたら、人生を絵につぎ込んできた、そのコストにつり合わない……なんて、考えてたらあの歳になつてた。絵をやめて一から何かをやるつてのも、もう無理だし、ハハハ。

美里 お母さんがいちばん信じてるくせに……。

間。

藍子 そうだ、今度預かってほしい物があるんだけど。

美里 いいけど。何？

藍子 ん。まだ書けてないから。できたら、渡す。

美里 なんか大事な書類とか？

藍子 死ぬまで見ちゃ駄目だから。

美里 死ぬとか言わないでッ。お願ひだから……。

藍子 はいはい。ありがと。フフ……。

間。

藍子 あんた……いい人いないの？

美里 何、急に？

藍子 安心してあの世に行きたい。

美里 だからあ（死ぬみたいなこと言わないで）。

藍子 はいはい。

美里 ……結婚しても、地獄が待ってるかもよお。

藍子 けど、さみしくはない。

美里 ん……それは……そうかもね。でも、お父さんもおるし。

藍子 お父さんだつて、いつかは。

美里 ん……。あ、個展つて、ホントにやるの？ もうすぐでしょ？

藍子 やるやる。美里が受付やつてあげて。

美里 ヤダよ。休めないよ、一週間も。

藍子 困るほど、お客様来ないか。アハハ。

美里 黙りじゃんそれ、アハハ。

間。

藍子 ああっ、そうだ！

美里 今度は何？

藍子 美里、動画つて編集できる？ スマホ。

美里 動画……て、何すんの？ うちの職場で動画たまに作ったりするけど。

藍子 教えて。ウフフ。

美里 （笑顔を誘わされて）何、何？！

優しくあつたかい音楽が流れてくる……

3

(以下スムーズに場面転換する) 藍子は『エーデルワイス』を鼻唄で歌いながら、ござつぱりとした、風合いのいいショールを羽織り、スマホで動画を撮る準備をする…美里はいつの間にか去り…代わりに伴介が居間に入ってきて、絵を描く支度を整える……

居間の、背もたれのある椅子に藍子が座っている。椅子の背にはクッショն代わりに暖色の毛布が掛けられている。体が弱っているのが見た目にも感じられるが、化粧つ氣のない顔にはさっぱりとした微笑が浮かんでいる。

その藍子の姿を伴介が絵に描いている。伴介に向けてスマホが据え付けられ、絵を描く様子をビデオ撮影している。そのスマホが気になるのか、伴介の筆は進んでいない。

藍子 ……ちょっとめんねえ。こっちのほうが……（手を伸ばして、スマホの位置や角度を調節する）

伴介 いいって。撮らなくて。

藍子 （伴介の）顔が陰になるから。

伴介 調子出ないよ。

藍子 ゴメンねえ、こっちの椅子のほうが楽なんだもの。アトリエじゃないと、思うような陰影が出ないんでしようけど。

伴介 違うよ、そんなんじゃなくて。

藍子 モデルが若くないと、筆が乗らない？ アハハ。

伴介 気が散るんだよ。こんな撮つても無駄でしょ。意味ないよ。

藍子 作家に興味持つてもらわなくちゃ、再生回数伸びない。

伴介 そんなことしなくつても……

藍子 何がバズるかわかんないでしょ。

伴介 バ、バズるって……？！

藍子 美里が動画の編集をしてくれるって言うし。ユーチューブ始めるのよ。照林伴介の絵画チャンネル。目標、登録者数一万人。再生回数十万回。

伴介 ……いい絵つてのは、必ず認められるんだよ。そんなことしなくつても。

藍子 またゴッホ？

伴介 そうじゃないけど……

藍子 ゴッホは三十七歳。照林伴介はもう七十七歳。死んでから売れるならまだいいけど……。

伴介 ……。

間……伴介はまた藍子の絵を描き出す。

藍子 個展は絶対やつてね。わたしが……いなくても。

伴介 またおどす。

藍子 約束して。会場費も振り込んであるんだから。

伴介 ……もうやらなくていいんじゃないか。俺の絵は駄目だった。世間は認めてくれなかつた。  
頼みの綱の絵画教室までクビになるし……

藍子 あれは……世代交代で、若い人を先生に雇つただけ。後進に道を譲る、よ。

伴介 美術館に絵の一枚も買ってもらえたなかつた。

藍子 コネよ、コネ、美術館に絵を買つてもらえるなんて。愛想を振りまいて、媚び売つたのよき  
つと。一流の画家のやることじやない。

伴介 世間は俺を忘れてるよ。

藍子 （スマホを手に取り伴介を撮影しながら）わたしが評価してきた。照林伴介の絵を。誰よりも。

伴介 摄るなつて。病氣だから怒らせないようにしてるので……。恥ずかしいよ。

藍子 わたしは平氣。もうこの世にいなから。

伴介 俺だつてすぐ追いつくよ。ゴッホはテオが亡くなつて、すぐ死ぬんだから。あれ……、逆か？

藍子 わたしがテオで、あなたがゴツホなら、死んでから売れる……この動画で。んで、儲かるのは……美里か。あんにやろめ、ウフフ。

伴介 いつもポジティブだな、あんたは、フフ。

藍子 （なんとか立ち上がるが、フラフラッとする） ……そうでもない。

伴介 どうした？！

藍子 吐きそう……！

伴介 え？！

藍子 ウツプツ！

伴介 わわツ……！

伴介は藍子の体を支えてトイレに連れていく。伴介（声）「大丈夫？」 藍子（声）「話しかけないで……」 ……

伴介が一人居間に戻つてくる。藍子を描いた描きかけの絵を見つめる。ふと、藍子のスマホを取り上げる。アプリを操作して動画を再生する。再生された動画の音声が聞こえてくる。その音声が流れる中、ゆっくりと暗くなる……

(冉生音声)

藍子 オオダケシホヘ。

伴介 ルウジヤダメニカズル……。

藍子 ワシナガリナナナナ歳。思林伴介ナカハナナナナ歳。死んでからお前がお母さんのお婆さんにならう。

伴介 .....。

西.....

藍子 何時お絶好やつしお。わだしが.....。おまへんか。

伴介 オオダケシホ。

藍子 約束して。お嬢様お振り込んであるんだから。

伴介 .....。お父さんへんかこいこじやないか。毎の終が駄目だつた。お嬢様お説教しておながつた。

頬みの綱の..... (冉生音声が消えていく)

.....

何日か後の午後遅く。美里が藍子に付き添い、病院から帰ってきたところ。藍子はやがて弱っている。美里は気遣いつつ藍子を背もたれのある椅子に座らせる。

美里 なんか冷たいもん、飲もうか。（台所へ）

藍子 行って帰るだけで死にそう、ハハ。

美里（声） 待たせるからねえ、病院。

藍子（疲れて息を吐く）ふうう……。

美里（声） ビールやめたんだ、お父さん？

藍子 わたしが死ぬまで飲まないって。

美里（声） え？

藍子 違う。わたしが良くなるまでって、言つてたか。

美里（居間に戻つてくる。手に持ったお茶のペットボトルの蓋を開けて、藍子に手渡す）お父さんは？ シェーンの散歩？

藍子 高校時代のお友達のおうち。喪中の葉書が来てたでしょ？

美里 ああ……。

藍子 お父さん、頼むわね。周りは死んでばつかだから。

美里 ……この前も戻つてこようかつて、言つたんだけど。

藍子 で？

美里 今の距離がいって。

藍子 そう……。（お茶を一口やつと飲んで）ああ、美味しいッ。

間。

藍子 ……ホントにいい人いないの？

美里 この年になつたら、駄目よ。面倒くさい。

藍子 あの人は？ いつだつたか、家に一度連れてきてくれた……あ（）が四角の。感じのいい人だつたのに。お父さんも珍しく気に入つてた。

美里 フフ……の人結局、離婚できなかつた。

藍子 えつ？ 騙されてたの？

美里 結果的には……かな。奥さんに子どもができちゃつて。

藍子 あら～。

美里 こんなんばっかり……男運がない。

藍子 んなこともないだろうけど……。

美里 じゃ、職場に戻るね。

藍子 逃げたな。ハハハ。

美里 夜は飲み会。サツチーと。

藍子 サツちゃんでもいいのよ、母さんは。ひとりでさみしく暮らすよりは。

美里 ハハ、考えとく。

藍子 ホントに。

美里 サツチーにも聞いてみなくちゃ。あっちにも好みがあるだろうし、フフ。

藍子 飲み過ぎないようにね。

美里 あつたかくしてねー。

美里、家を出していく。藍子は椅子に体を預けたまま、見送る。口が傾いてくる。藍子、ふと『エーデルワイス』を口ずさみ歌う。

藍子 ら～り～ら～ ら～り～ら～ ら～り ら～り ら～ら……（と深く息を吐く……末期の息  
のように）ふうううう……

藍子、椅子に体を沈めて死んだように動かなくなる。夕闇が濃くなる……

伴介が帰つてくる。外出用のジャケット姿で。なんだかひどくくたびれている。

伴介 ただいま。

藍子 ……。

伴介 ああっ、くたびれたくたびれた……。

藍子 ……。

伴介 （椅子にもたれて、だらしなく横になっている藍子に気づく） ん？

伴介はジャケットを脱いで、藍子の体にかけてやろうとする。と、不安がきざして。

伴介 藍子……？ 藍子。藍子ッ。（体を揺すったり、頬を軽く叩いたりする） おいッ。おいッ。藍ちゃんッ。藍ちゃんッ……！

藍子 ……。

伴介 （鼻と口の前に手をがざして……） ああ……ッ！ （両手を合わせて、口の中で） ナンマンダ……ナンマンダ……

藍子 ……フフ。

伴介 （絶望して） アアツ藍ちゃんツ……！

藍子 フフフ。

伴介 （氣づいて） ……ん?! ええつ……!

藍子 アハハ……！

伴介 息してなかつたよお……！

藍子 フフツ、息止めてた……アハハ。

伴介 こっちの心臓が止まるよお。からかうなよお。

藍子 ごめん、ごめん。

伴介 フフツ……アハハツ。

藍子 ウフフ……アハハツ……（笑つてて） お腹痛い。

微笑み合う。

藍子 藍ちゃんって、久しぶりに聞いたなあ。

伴介 えつ……フフ。

藍子 昔はあなた、藍ちゃんって。

伴介 あんただつて、伴ちゃんって。

藍子 フフ。

伴介 ハハ。

藍子 ……どうだった？

伴介 あんたの演技力には……こっちが死ぬかと。

藍子 うん。お友達。

伴介 ああっ……線香あげさせてもらつた。

藍子 ん。

伴介 ……息子が、美里ぐらいのと、その下にもいて。二人とも一流企業に勤めてるらしい。

藍子 親のコネ？

伴介 まさか。ま、あいつもいいとこ勤めてたからなあ。

藍子 そうね。

間。

伴介 ……おかしなこと言うんだ、奥さんが。

藍子 ん？

伴介 主人は生前、あなただけは……ほかの誰にも、どんなに頭を下げられても一円だつて貸さ

ないけど、照林さんだけには、何かあつたら、僕はお金を貸してやるんだ、って、よく言つてました……つて。

藍子 どういう意味？

伴介 だから、あいつにとつて俺は、それだけ大切な親友だつたつてことなんだろ……。

藍子 ふうん……。

伴介 でも俺、言つてやつたの。奥さん、俺はね、逆に、どんなに苦しくても、あいつだけからは、お金は借りませんよつて。だつてそうでしょ、親友じやなくなつちゃうから。絵が売れなくなつたつて、食いつめて路頭に迷つたつて、んなこと、絶対にしませんよつて。

藍子 フフ……奥さんに言つても。

伴介 なんか、俺のこと、下に見てたんだなあつて。俺があいつから、金借りるわけないじやんよ

ツ。

藍子 （なだめて）まあ、まあ……。

間。

伴介 にしても、元気だつたなあ奥さん。

藍子 フフ……。

伴介 三ヶ月も経つてないのに。孫が……七人いて、パワーもらつてんだつてよ。さみしく感じる暇がないってさ。

藍子 孫かあ……フフ。もう一人ぐらい、子ども産んどくんだつたかな。……美里が怒るか。

伴介 （たわむれて）今から頑張るか。

藍子 馬鹿。スケベジジイが。ハハ、こそばゆい。

伴介は藍子に優しくキスをする……。

藍子 ……もういよいよ駄目だつてわかつたら、飲むのも、食べるのもやめて、体の中空っぽにして、きれいに死にたい。下（しも）の世話されるなんて、絶対いや。わかつた？

伴介 わかつた。

藍子 ホントよ。

伴介 誓うよ。

藍子 ……汗くさい。風呂入つてきたら。

伴介 もう一回、チューしてええか。

藍子 フフ、聞く馬鹿があるか。

ゆっくりと暗くなる……同時に優しくあつたかい音楽が流れくる。

5

前の場から少しあと。夜になっている。藍子は一人で風呂に入っている。伴介が居間から風呂場に向かって声をかけている。

伴介 それ、あれだ……あれ、んうと、なんだっけ……草津の湯！ ババンバ、バンバンバン、ハ  
　　ヽビバノンノン。ババンバ、バンバンバン。ええ香りじやろ？

藍子（声） あつたまるく。

伴介 ひとりで大丈夫？ 背中流そうか？

藍子（声） まだ見たいか、わたしのヌード？

伴介 見たいよ、いつだって。若いころはいいスタイルしてたよなあ。

藍子（声） もう胸ないわよ。

伴介 あんたのお陰で大賞をいただいたなあ。

藍子（声） モデルのお陰ね、ハハ。

伴介 勢いがあつたなあ、あのころは。

藍子（声） 『エーデルワイス』の鼻唄を歌う。か弱いが、リラックスして気持ち良さげ） ら～ら  
ら～ら～ ら～

伴介  
(馴染みの鼻唄を聞いて) フフフ。

伴介のスマホから電話の呼び出し音が鳴る。伴介、電話に出る。

伴介 ん。ああ。今、風呂。ん。ん。ひとりで入る気力あるよ。鼻唄歌つてる、例の、得意の。

ん。ん。氣をつけて、声かけるようにしてる。足が伸ばせるから、湯船につかりたいんだってさ。ああ、感謝してるよ、手すり付けてもらつて。あれなかつたら、ひとりじゃ無理だろ。……ん。ん。まあまあだな。準備はほぼほぼ終わつてるよ。宅配便に来てもらつて、ギヤラリーに送つてある。あとは……母さんの絵の仕上げだな。……母さんが絶対やれつて言うんだもの。父さんだつて、一週間も家を空けるのはどうかと思うけど……

藍子の鼻唄が聞こえなくなつてゐる……「ボツチャン……ツ！」と水の中に何かが沈む音が不安げに響く……

伴介 ……ああ、頼むよ。ちょくちょく顔出してもらえれば。ん、日中は寝てるから大丈夫だろ。

ん。ん。……え？　ああ……ま、今までいいよ、父さんの元気なうちは。美里には美里の生活があるんだから。仕事もさ。ん……ん……。ああ、ありがと。ん。わかった、母さん喜ぶわ。ありがと。じゃ、切るよ。

伴介は電話を切つて、スマホを置く。風呂場の藍子に向かつて声をかける。

伴介　美里から電話あつたよ。今度、梨持つてくるつてよ。サツちゃんと梨狩りに行つたんだつてや。……？

風呂場　からはなんの返事もない。

伴介　聞いてる、藍子？　……藍子？　またおどかそうつたつて無駄だよ、フフ。

沈黙……

伴介　……おおつい？！

伴介は異変を感じ、居間を出て風呂場に入る。舞台に伴介の悲痛な声だけが響く。

伴介（声）　おーいっ、どうした？！　藍子……ツ？！　ああツ……なんでツ！　藍子！　息しろツ！  
藍子！　藍子ツ！　あああく～ツなんで、なんでツ！　藍ちゃん……！　藍ちゃんツ！　藍  
ちゃん！……

〔6〕

真夜中の居間。その空間はいつもより陰が濃く、現実的な雰囲気ではない。伴介はキャンバスに向かい藍子の絵を仕上げている。しかし、伴介の正面には誰もいない……。すると、伴介の背後から藍子が浮かび上がるようひょっこりと現れる。伴介は前を見たままである。心の中に現れている藍子と言葉を交わす。

藍子（伴介の描く絵を後ろから覗いている）個展をやるのは、約束よ。

伴介　だから描いてるだろ……。

伴介は藍子の絵を描き、藍子はそれを後ろから見守っている。

伴介 ……なあ。

藍子 ん？

伴介 届出しないとまずいんじや……？ 医者に知らせなきゃ。

藍子 わたしがいいって言つてるんだから。個展の準備に夢中で気づかなかつたつて、言えば？

伴介 でもなあ……

藍子 キヤンセルしたら、信用がなくなる。会場費も、チラシや案内状も無駄になるし。またやるつて言つても、会場押さえるのも大変。

伴介 んくく……

藍子 そもそもあなた生きてる？ 気力わく、個展やる？ わたしいなくて？

伴介 せめて美里には……

藍子 —！

伴介 心配するだろうし。

藍子 ……あの子、取り乱して、個展どころじゃなくなるきっと。反対する。

伴介 そりやそりや。俺だって受け止めらんないよ。覚悟はしてたけど。

藍子 わたしもよ。まさかねえ。お風呂で溺れるとは、ハハ。

伴介 笑いごとじや……

藍子 あれよ、死亡届を出さなくて死体遺棄で警察に捕まつても、あれよ、執行猶予がつくわよ。

初犯だし。

伴介 僕を前科者にしたいのかよ!!

藍子 んうできればそれは避けたいかも……ハハ。

間。

伴介 なんで、そんなに個展にこだわるんだ？

藍子 そりや、名の残る画家になつてほしいから……かな？

伴介 このままじゃ、裁判所に名前が残るよ。

藍子 あれよ、初めて伴ちゃんの絵を見たときの感動が、あれなのよ、忘れられないの。

伴介 ああ……いといギャラリーの？

藍子 個展なんて招待されるの初めてだったから、緊張して行つたんだけど……あくまでもよかつたなあ。照林伴介の小宇宙がギャラリーの空間いっぱいに広がつてて。これつて日本のゴッホじゃない？ ゴッホよりすごいんじゃないって。感動したなあ。

伴介 全然売れなかつたけど……評価もさつぱり。

藍子 （冗談めかして）見る目がない、どいつもこいつもうツ。

伴介 ハハハ。あんただけだな、俺の味方は。

藍子 わたしはテオですから。照林伴介のテオ。

伴介 フフ……。

間……絵に最後のひと筆を入れる。

伴介 ……どうだ、これで。

藍子 ん。ん。いい感じ。モデルのお陰だ。

伴介 ハハハ。

藍子 今回の個展の目玉だ。

伴介 自分でほめ過ぎ。

藍子 （伴介の頭を後ろからそつとなでて）ありがとう……伴ちゃん。

伴介 （こうえきれずに涙が落ちる）ううッ。……つううッ……！

藍子 伴ちゃん……！

ゆっくりと暗くなる……

7

前の場の次の日。その朝早く。伴介の個展の初日当日である。伴介は悄然と個展会場に出かける準備をしている。他所行きのジャケット姿。できたばかりの藍子の絵を絵画用の鞄にしまおうとしているところ。そばにキャリーバック。居間のテーブルには飲みかけのマグカップが置かれている。

そこに、美里が慌ただしくやってくる。

伴介 (気づいて) おうつ。

美里 (必死の面持ちで) お母さんは?

伴介 ん……

美里 お母さんはツ?

伴介 や……その……。おおっ飲むかコーヒー、猫のウンチの。うまいぞおこれ。

美里 LINEの返事がない。既読になんない。朝、必ず連絡くれてゐるのに。お父さんも電話に出ないしつ。

伴介 あれだ……浪江叔母さんのとこに行つてる……きのうから。家にひとりじゃ、さみしいって。

美里 え、でも。きのうの夜、お風呂入つてるつて言つたじゃない？

伴介 だから……あれから。タクシーで。

美里 でも。

美里、玄関に駆けていく。すぐに戻ってきて。

美里 お母さんの靴、あるじゃないッ。杖も。

伴介 だから……もう歩けなくて……かついでタクシーに……

美里 うそッ。お母さんッ。お母さん！

美里は母を呼びながら、二階の藍子の部屋へ駆け上がる。

伴介 （観念して一つ大きく息をつく）ふうううつ……！

二階から美里の悲痛な声が響く……

美里（声） お母さんツ！ お母さんツ。ねえ、ねえツ！ 起きて。起きてよツ。お母さん……ツ！

伴介 ……！

美里が涙を流し、困惑し、怒り悲しみ、憤りで足を踏み鳴らしながら居間に戻つてくる。

伴介 ああツ……ごめん。

美里 冷たいよツ、お母さん。

沈黙。

伴介 ごめん。悪かった。

美里 いつツ？ いつツ？ なんでわたしに連絡しないのツ？！

伴介 ……。

美里 お医者に来てもらわなきやでしょツ……！

伴介 ん……。

美里 いつ？ いつ！

伴介 きのう……美里の電話のあと……風呂でおぼれてて……

美里 おぼれたの!! お母さん、お風呂で死んだの??

伴介 ああ。

美里 なんですぐ救急車呼ばないのツ!!

伴介 きれいにしてやろうと思つたんだよツ。裸なんて、見られるの、嫌がるだろ母さん。

美里 助かつたかもしれないのにツ……!

間。

伴介 お漏らししてたんだよツ。

美里 え……?

伴介 そんなの見られるの、嫌がるだろ……。

美里 でも……!

伴介 いさぎよく死にたい……死ぬとわかつたら、食べるのも飲むのもやめて、下の世話の迷惑も  
かけずに、きれいに死にたいって、いつつも言つてたんだからツ。

美里 ……!

伴介 体をきれいに洗つて、二階までかついで、着替えさせて、風呂をなんとか掃除したら、疲れ  
果ててき……氣力が抜けて、うとうとして。お前に連絡しなきやつて思つたけど、もう真夜

中になつてて……ああつそうだ、母さんの絵を仕上げなくちゃつて。母さんと約束したんだから。母さんが……届出はいいから、個展は必ず開いてよつて

美里 それつて、死亡届を出さないのつて、犯罪だよ。

伴介 出すよ……個展が終わつたら。

美里 だからツ。

伴介 絶対個展やれつてのが、母さんの望み……遺言なんだから。

美里 ……！

伴介 それに、かかりつけ医の黒藤先生なら、一、二、三日ズラしても死亡届書いてくれるよ。

美里 んなわけあるわけないじやないツ。

伴介 あいつがツ——、藍子のガンを見逃したんだ。そのぐらいしたつて、バチ当たんないよツ。

美里 もうツめちゃくちや。

伴介 （自棄になつて）あさつてには藍子の厚生年金も入るし。

美里 お父さんツ。

伴介 この天氣なら、腐らないだろ、母さんも。

美里 いい加減にしてツ。

伴介 ……！

美里、スマホを取り出して、電話をかけようとする。

伴介 おい？

美里 取りあえず黒藤内科に電話する。

伴介 個展開けないだろ？

美里 行けばいいでしょ。わたしがお母さんを見てるからッ。

間。

美里 （電話が通じて）すみません、黒藤内科ですか？

伴介 ……あつ。

美里 （伴介に）何？

伴介 （二階へ行こうとする）ちょっと。

美里 お父さんッ？

伴介 母さんの所へ……藍子の所ヘッ。

美里 何ッ……!! ヤダ。早まんないでよッ。わたし一人にする気？

ツ！

お父さんッ。お父さん……

伴介、居間に戻ってきて。

伴介 リップクリームぬつてやろうと思つてさ。化粧、嫌いだからなあ母さん……せめて。

優しくあつたかい音楽が流れてきて……

美里

(混乱して何がなんだか泣けてくる) うわああああんッ……！ ……（電話から相手方の声がして、他所行きの声に急に繕つて）あつ、すみません、黒藤先生ですか？ 照林と申します。はい、照林藍子の娘です……あの母が……母がツ……

伴介、居間の戸口で美里の様子を見守つて、一つ、二つうなづくと、二階の藍子の部屋へ上がっていく。

音楽が高鳴つて……ゆっくりと暗くなる。

暗闇の中、お経と木魚の音がしばらくあつて……鈴（りん）がチーンッと鳴る。と同時に明かりが入る。

そこは葬儀場。藍子のお葬式。喪服姿の伴介が参列者に（客席の観客を参列者に見立てて）喪主の挨拶をしている。そばに喪服の美里が付き添うように立っている。美里の手には涙をふくハンカチ。祭壇には、伴介が描いた藍子の絵が遺影代わりに飾られている。

伴介 ……この絵は、家内の藍子が初めて自分から描いてくれとせがんだ絵でして。出来はどうでしよう……んくまだまだですが……藍子の人となりはよく出てるんじゃないかと……んく（自分の描いた絵の出来を仔細に観察してしまう）

美里 （小声でいさめて）お父さん。（列席者に）すみません。  
伴介 （列席者のことを一瞬忘れていたことを思い出して）ああッ。

美里、用意していた手紙を伴介に。

美里 お父さん。

伴介 ん？

美里 お母さんの手紙。

伴介 手紙？ 藍子の？

美里 自分のお葬式でみなさんに読んでほしいって……どうせお父さん、ろくな挨拶ができないだろうからって。

伴介 んん！

美里 この日のためについて、手紙を残してたのお母さん。預かつてたの。

伴介 そうか……藍子が……！

美里 （列席者に）すみません。

伴介 （列席者に）藍子が……きょうのために、手紙を書いてたそうで。読んでもよろしいでしょ  
うか。……はい。（手紙を開いて）「本日は、お足元の悪い中……かどうかわかりませんが（笑）  
……また、お忙しい中、わたしの葬儀のためにお集まりいただき誠にありがとうございます。  
生前はわがままなわたしにお付き合いいただき、ありがとうございました。感謝しております。  
わたしは自分の「好き」を押し通して生きてこれて、幸せな一生だったと思います。こ  
れもひとえに皆様のお陰です。ただ、心配なのは、遺された夫の伴介のことです」。いいんだ  
よ……俺のことは。

美里 （小声でいきめて）お父さん、読んで。

伴介 ……ん。「こだわりが強くて偏屈で、いまだ絵の道をきわめておりません」……なんだこりや？

美里 （いさめて）お父さん。

伴介 （しぶしぶ読み続ける）……「本日会場に、娘の美里に頼んで、夫照林伴介の絵を飾つてあるはずです。どうぞご覧いただき、余裕のあります方はご購入いただけますと、葬儀代の足しに……」（思わず泣く）ううつ……！

美里 そこ、泣くところ!! （しつかりして）お父さん!

伴介 す、すまん。……「夫は、妻が先に亡くなると、すぐにあるとを追うと申しますが、そのようなことにならないように、皆様に見守つていただけますと幸いです。今しばらくは天国で一人の時間を楽しみたい……」

美里 （思わず吹き出して）プツ。

伴介 （美里をじろつと見る）んん??

美里 ごめん。続けて。

伴介 「……ぜひ皆様のご支援で、照林伴介に良い仕事を……残せるように導いてやつてくださいませ。それが……わたしの切なる願い……」（感極まって涙があふれ、読み続けることができなくなる）

美里 （涙涙で）お父さん……！

伴介 ううううううう……藍ちゃん……ッ！ ……

絵の中の藍子の笑顔を残しつつ……暗転。

9

暗闇の中、お経と木魚の音がしばらくあつて……鈴（りん）がチーンッと鳴る。と同時に明かりが入る。

そこはまたまた葬儀場。伴介のお葬式。喪服姿の美里が参列者に（客席の観客を参列者に見立てて）喪主の挨拶をしている。手に涙をふくハンカチ。祭壇には、伴介が描いた遺影代わりの自画像と、そのとなりに伴介が描いた藍子の絵が二つ並べて飾られている。

美里

本日は……涙[雨]でしょうか……お足元の悪い中、父照林伴介の葬儀に参列いただき、誠にありがとうございます。母藍子の葬儀でお集まりいただきましてから、わずか半年でこのようないままだしばらくはこの世で絵を描いてほしい、大業を成し遂げてほしいという母の遺言も聞かずに……。長年飼っていた愛犬のシェーンが、老衰で亡くなつたのもこたえたようです……。（祭壇の藍子の遺影を示して）この母の絵は、父が生前、最期に描いたものです。普通のお葬式ではありえないのですが、自分の遺影は、母の絵のとなりに自分の自画像を

並べてくれと……自分がきょうまで生きて絵を描いてこれたのは、藍ちゃんのお陰だと……（微笑みつつ）お母さんが喜んでるかどうかはわかりませんけど、フフ。（祭壇の伴介の自画像に呼びかけながら）……お父さん、わたしもたまには絵を描いてみるね。もううるさく言われないから、のびのび自分の好きな田舎の風景とか。ん……自分の顔も描いてみる。わたしも自分のお葬式には、二人の絵のとなりに、わたしの自画像を並べるね。問題は……誰がわたしのお葬式をやってくれるかだけど、フフ。（参列者に冗談めかして）誰か、この中でいい人いませんか、こんなわたしで良かつたら？ ウフフ。（小声で）わたしより年配の方が多いようですけど（笑）……冗談はさておきまして……本日は本当にありがとうございます（笑）。ロビーに父の絵を飾つてありますので、「ごゆっくりご覧いただき、父を偲（しの）んでいただければ、娘として、これ以上の喜びはありません……その上、お買い上げいただければ、葬儀代の足しに……（冗談で泣き真似）ううつ、この前の父の個展が大赤字で……（笑）。ウフフ。本当に本当に、ありがとうございました……！

美里は列席者に一礼して、祭壇を振り向き、伴介と藍子の絵に微笑みを送る。

美里 お父さん……お母さん……ありがと……やみしいよおツ。

美里の笑顔の涙の様子を見せながら……ゆっくりと暗くなる。  
優しくあつたかい音楽とともに……

——幕——